

小笠原眞詩集『目下のところ』を拝読し

瀬川紀雄

小笠原眞氏は一九五六年に十和田市のお生まれで、八戸高校、岩手医科大学医学部ご出身。長らく十和田市にて耳鼻咽喉科医院の先生をされている。そんなご多忙と思われる立場にありながら、一九八八年に第一詩集『一卵性双生児の九九』を上梓し、「詩が好きでたまらない」故だろう、本詩集『目下のところ』は第七詩集となる。その間に、労作であろう各詩人の全詩集を熟読しての優れた詩人論集『詩人のポケット』と『続・詩人のポケット』も刊行している。本詩集の詩編の内容からだけ小笠原氏の詩との関わり合いを抽出してみると、以下のようになるだろうか。「ぼくの在籍した同人誌」と「続・ぼくの在籍した同人誌」、「シニールな青春時代」「忍ぶ川」が主な典拠だが。

中学時代、太宰治の『人間失格』を読んで文学に興味を持つ。

高校時代、二年の時に母校で三浦哲郎が記念講演し、

文学への興味を強める。三浦も同じく籠球部に所属していたことと、中学時代に『人間失格』を読んで文学に興味を抱いたことに感銘する。今でも三浦文学の骨格および原点は抒情溢れる私小説からなると考えている。

大学時代、中原中也を読み、大学三年の頃に毎日大学ノートに主に感傷的な詩を綴っていた。やがて超現実主義に興味を抱く。五年生の時に盛岡の同人誌「百鬼」に入会。一九八〇年の七号から参加。

「百鬼」は東野正ら若い詩人たちが結成したものという。「講演とディスカッション」も開催しては、詩以外の芸術や演劇についても大いに論じ合ったという。この時期、自身は殊の外シニールな詩を重んじ「孤高の前衛詩人」たらんとしていたようである。「百鬼」は折しも二〇〇〇年十二月に二十二号刊行で自然消滅。

八戸の圓子哲雄の「朔」に、二〇〇九年の一六五号から参加。毎号主に詩人論を寄稿。二〇一五年に「朔」は一七九号をもって終刊。

その後、年四回発行の上十三医師会誌に二編の詩を掲載し続ける。締切という機会による「機会詩」と卑下されているが、県の詩界では多作の方としても過言ではないだろう。

さらに、二〇二三年五月から、工藤浩司先生の誘いを受け、弘前の詩誌「亜土」に参加。

本詩集は、最近の発表である令和五年十一月刊行の『青森県詩集 青森2023』への寄稿詩「目下のところ」から遡って、平成二十九年七月刊行の『上十三医師会誌』109号への「虎猫と鴉」までの三十三編からなる。実はその六年間に全部で五十七編の詩を書いており、やはり寡作とはいえない。〈熟成詩〉へと、推敲も十分なされているだろう。やはり詩作が好きなのだ。

本詩集に「熟成詩」という詩がある。概要は以下の通りである。魚は少し寝かせた方が美味しくなるのは身の中のアデノシン三リン酸がイノシン酸という旨み成分に変わるから熟成魚になるという。同様に一定期間低温で保存する熟成肉や一晚寝かせたカレーに触れたうえで、推敲魔・推敲の鬼と呼ばれた詩人・山之口獏が一編を仕上げるために二百枚から三百枚の原稿用紙を屑にしたことを謳歌している。そして最終連で「どんな詩でも推敲を重ねると／良くなる」ということを原則としていることを告げている。何度も推敲することによって熟成詩が生まれるという。

この「成熟詩」のように、詩についての詩―メタ詩とでもいおうか―ジョン・ダンらのメタフィジック・ポエムではない―、時にそんな詩を書かれるのも氏の特徴かもしれない。本詩集にも「詩はどのようにして生まれるのか」や「どんな詩も」、そして「装填思案」「科学がどんなに」「医学と文学」がある。

現在おかれた事象や行動と

過去の記憶の海とが

絶妙に絡み合い

特殊な化学反応をきたしたときに

最初の一行が生まれる

このような最初の一行はどこから生まれるか、とさらに問い、田

村隆一の「最初の一行は神様が書き、二行目からは人間が書く」という言葉を受け、やはり詩は神がかりな分野に属するのだろうかと自問する。そして、「推敲こそ人間業を発揮する本来の場合のかもしれない」と。氏の詩作中には、推敲中に種々のヴァリエーションが生まれ、実はそれだけで小詩集になるようなたくさん詩が誕生しているのかもしれない。

「どんな詩も」は、簡潔な詩論になっている。「すべての詩は／記憶というマテリアルから／紡ぎ出される」「体験したことが／記憶の海を形成する」「十人いれば／十通りの記憶の海が存在する」。

記憶の海から

掬い上げられる言葉たち

言葉そのものには

個性はない

だがその言葉が

どんな状況で選ばれるのか

どんな記憶から掬われるのかで

詩に個性が生まれる

「言葉の配列は／詩作の技術論にすぎない」「いい詩とは／感動す

る詩である」「豊饒な記憶の海があれば／詩に深みが生まれる」「つまるところ／詩は体験なのだ」。詩観を散文的に叙述しているのではなく、情感がこもっておりどこか韻も感じさせ、歴とした詩として読まされる。

詩集の装填に関しても思案し、それも詩にしている。

見て触ってその質感を楽しむものでもある

字の配列 色 大きさ 重さ 肌ざわり

読者は全身全霊の感覚を動員して

十分に味わい尽くすべきである

装填の例として上げている詩集の詩人に、小生無知な香川弘夫、清水恵子があり、小笠原氏の今日の詩人たちの詩集の渉獵のすごさを感じられる。因みに、小笠原氏から小生初めて名を教わった井川博年、八戸に來られた八木幹夫、小笠原氏がお得意とする小山正孝などの詩人たちも登場する。また、自ら俳句もやられていて、芭蕉や西行にも触れている。

「科学がどんなに」は、ビートルズの売り上げが貢献したCTスキャナーからMRI、遺伝子診断、iPS細胞、かつ人口内耳と発展してきたことを賛辞しながらも、人間同士の諍いや戦争が無くならないのはなぜかと問い、最後の二連は次の通りである。

案外 人のこころや感情は
進歩発展するものではないのであろう

縄文時代の人たちも

ぼくらと同じような気持ちで

きつとあの蒼い空を仰いでいたに

違いのないのだ

「医学と文学」は、医学は実の世界で文学は虚の世界とし、どちらも言葉を用いるが文字は抽象的概念であり、それが文学では頭の中で虚像として再構築され実像のごとく想像される。一方医学の方では、経験という実学から発展し言葉をより具体的な医学用語にした。つまり抽象性を排除し一つ一つの医学用語を生み詳細な定義を与えた。昨今その医学用語が膨大になり、完璧にマスターするのは不可能になってきた。

医学も実だけに固執せず

文学の虚も取り入れなければ

やっていけない時代が

やって来たのだろうか

実に虚心に帰って

なお、本詩集には、医師としての臨場感溢れる医療現場の詩「医師の勘」と、止血できなかった症例はなかったが医師は少し臆病な方がいいと真剣になる「鼻出血」、「死を思う」の意味の「メメント・モリ」が含まれている。

そのような命への尊重が、学会時に訪れた海外での史跡や自然への眼差しにも表れている。そこに不条理な政治への強い批判も含まれている。秀吉と日韓併合で大損害を受けたソウルの「景福宮」、カンボジアのポル・ポド政権下による虐殺犯罪博物館という「負の遺産」、密林のアンコールワットへ等まるで宗教的争いも含む数々の争いに巻き込まれたかのように三日間歩いた「遺跡巡り」、ニュージーランドの先住民であったマオリ族の戦士の舞踏である「ハカ」。そして、ボルドーから向かった西欧最大の「ピラ砂丘」。砂丘の山頂で、どこまでも続く白い砂、見下ろせば真つ青な大西洋のアルカシオン湾、かつスカイブルー。何と世界的でスケール感があり、そして深い歴史を引きずっていることであろう。

そのような体験を踏まえながら、小笠原氏は、昨今は身内の方々を主に日常観察を重んじ、それに過去の追懷を滲ませて詩作しているようだ。それが「目下のところ」の作風と自ら「あとがき」でも述べている。早くに父母との「虎猫と鴉」にも見られるが、ベランダの傷ついた鷺を救う「鷺の恩返し」、托卵する理由を分かりながらも嘆く「郭公」、生まれ育った無き「ぼくの家」、父のことや遺伝

子が最も遠い者同士が惹かれ合うのかと仙台の孫娘すずの詩など、心温まる詩も多い。

以上、時に専門用語も出るものの全体的に分かりやすい詩行であり、小笠原先生らしいヒューマンなお人柄がにじみ出ている詩集といえよう。提喻のなか誇張や列叙を避け、せめて対句ぐらいで実直で真摯な表現、実際的な内容を重んじより十全に作品化する詩作姿勢を感じ、とても共感を覚える。事実や真実、および体験に基づいた内容と表現であり、詩と真実という観点から信頼して鑑賞でき、それなりに理解でき、その分そこから自らの体験・思念を重ねて自由に想像的に鑑賞内容を広げていくことが可能となっている。また、詩集もそうだが、文学に情的な共感だけではなく「啓蒙」とヒューマニズムを求めている小生は、本詩集に多く啓蒙もされとても読み応えがあり、感動する詩が詰められた素晴らしき詩集に思われる。

小生の個人的な蛇足だが、拝読している最中あるいは読み終えて、無知な人名、歴史的な事件についてネットで調べさせられた。例えば、香川弘夫(1933-1994)について。そうだった。読んだことがない詩人だが、何度も往復している小生だけに詩集名「わが津軽街道」が気にならなくて調べたことがあった。八幡平市の晩翠賞受賞詩人だった。【朗読とチェロの夕べ 香川弘夫「わが津軽街道」】のYouTubeも見。清水恵子氏に関しても、そうだった。日本詩人クラブの方で、早くに新人賞を受賞し活躍されておる方だった。

他に景福宮や虐殺犯罪博物館、ピラ砂丘、オペラ歌手のキリ・テ・カナワの歌唱に驚きCDを2枚買い、その時にマオリ族について少し知り興味を持ったがその戦士の舞踏「ハカ」などをネットで学ぶ。最後に詩「引き算から生まれる幸せ」から最後の二連。実に同感である。

地球が悲鳴を上げている

自然が悲鳴を上げている

生物が悲鳴を上げている

そろそろ

地球規模の

断捨離が必要なのだ

詩誌「風」第137号掲載

瀬川紀雄HP「[シエカの風](#)」